

【新版『多読で親しむ』全8講座の翻訳パート目次】

【(1)：カール・W・ハート著『マイケル・ジャクソン：ザ・キング・オブ・ポップ』】	2
【(2)：シェイクスピア著『ザ・トラジェディ・オブ・マクベス』の抄訳】	6
【(3)：マーク・トウェイン著『カリフォルニア人物語』】	10
【(4)：オー・ヘンリー著『最後の一葉』】	13
【(5)：エリス・パーカー・バトラー著『ブタはブタ』】	16
【(6)：ワシントン・アーヴィング著『悪魔とトム・ウォーカー』】	20
【(7)：ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)著『日本海に沿うて』】	23
【(8)：ジャック・ロンドンの『キーシュ』】	26

→ちなみに朗読がYouTube上にあるものもありますので、聴いてみるのもオススメです。

→(3)：『カリフォルニア人物語』の音声：<https://youtu.be/3t3ZV00WHdQ>

→(4)：『最後の一葉』の音声：<https://youtu.be/z70HXdOrGIQ>

→(5)：『ブタはブタ』の音声：<https://youtu.be/kDJhNNOwSEA>

→(6)：『悪魔とトム・ウォーカー』の音声：<https://youtu.be/twp0Ccl8AgY>

→(8)：『キーシュ』の音声：<https://youtu.be/MCNRhTv5fJg>

【『多読で親しむ』第1講の和訳 L5共同作成(田中校正済み)】

【(1)：カール・W・ハート著『マイケル・ジャクソン：ザ・キング・オブ・ポップ』】

¶① マイケル・ジョセフ・ジャクソンは1958年8月29日にインディアナ州ゲイリーで生まれた。ゲイリーは、イリノイ州シカゴの近郊で、インディアナ州の北西の隅にある貧しい工業都市である。ゲイリーは、米国の多くの都市が抱えているのと同じ問題を抱えていたし、そして今もなお抱えている。すなわち、高い失業率、ギャング、ドラック、そして犯罪である。ゲイリーの人々は仕事を持つことができれば幸運であった。多くの人々が、ミシガン湖の南岸沿いの製鉄所で働いていた。昼も夜もずっと、工場からの煙は空気にひどい臭いを与えた。しかし、それは仕事の匂いだったので、誰も文句を言わなかった。

¶②ゲイリーの通りには小さな家族居住用の住宅が並んでいた。その近所は、日中は静かだったが、夜は危険であった。暗くなった後、ゲイリーのメインストリートは夜遊びで活気づいた。「シンシティ(罪の街)」というのが、人々がゲイリーを呼んだ呼称であった。彼らがその名前を付けたのは、ゲイリーが、シカゴやインディアナの他の地域から、人々が地元ではできないようなことをするためにやってくる場所だったからである。「シンシティ」の明るい光からそう遠くないジャクソンストリートの2300番地には、ジョー・ジャクソンとキャサリン・ジャクソンが住んでいた。

¶③ジョー・ジャクソンが楽な生活を送ったことはなかった。彼はアーカンソー州で生まれた。両親が離婚したとき、彼は父親と一緒にカリフォルニア州オークランドに引っ越した。彼の父親は、自分の子供にも生徒にも平等に言うことを聞かせるような、学校の先生であった。ジョーは父親から重要な教訓を学んだ。すなわち、生き残れるかどうかは規律と勤勉にかかっているということを知ったのである。彼は厳格で、勤勉な男になった。

¶④彼の父親が再婚した時、ジョーは彼の母親と一緒に住むために、シカゴの東に引っ越した。彼は高校を辞め、少しの間、ボクサーになった。それからほどなくして、彼はキャサリン・スクルーズに出会った。彼らはそれから半年後の1949年の11月に結婚した。

¶⑤ジョーは厳しかったがキャサリンは温和で愛に溢れていた。彼女は敬虔なクリスチャンであった。マイケルはのちに語ったところによると、母親はマイケルに、人生で最も大切なものは親切心や愛、他者に対する思いやりであるということを知った。

¶⑥ジョーは宗教に興味がなかった。ジョーは宗教はつまらないと言っていたのである。しかし、ジョーとキャサリンは音楽に対する強い愛を共有していた。ジョーには、1950年代に鉄鋼所での仕事があった。夜になると彼はザ・ファルコンズと呼ばれるバンドでギターを弾いていた。そのバンドは、ゲイリーのバーやナイトクラブで小さな成功をおさめていた。ジョーは、工場での仕事を辞めてフルタイムのミュージシャンになることを望んでいた。

¶⑦ジャクソン通りのジャクソン家は、マイケルが産まれる前から大家族だった。2人の姉の、モーリーン(レビー)とラ・トーヤ、それから4人の兄の、ジャッキー、ティト、ジャーメイン、そしてマーロンに、マイケルが加わった。そこへさらに、弟のランディーと、妹のジャネットがマイケルの後に産まれた。

¶⑧ 9人の子供で、ジャクソン家は込み合っていた。マイケルは後に「ゲイリーにあった僕たちの家族の家は小さくて、ほんとに3部屋しか無かったけど、当時は僕にとって、もっと広く思えた。玄関のドアから五歩で、奥に着いてしまう。ガレージ同然の大きさだったけど、そこに住んでいた時は、僕たち子供にとってはそれでよかったんだ。」と、当時を振り返った。

¶⑨ 11人家族にとって、2つの寝室は十分ではなかった。ジョーとキャサリンは1つの寝室を共有していた。男の子たちはもう1つの寝室の、3段ベッドで寝ていた。ティトとジャッキーは1番上に寝て、マーロンとマイケルは真ん中で寝て、そしてジャーメインは1番下で寝ていた。女の子たちはリビングのソファで寝ていた。後に、ランディーが生まれた時には、彼はまた別のソファで寝た。冬には、家族は暖を取るために、キッチンストーブの周りに座って、多くの時間を過ごしたのである。

¶⑩ ゲイリーで1960年代に家族を養うことはただでさえ難しかった。しかし、9人の子供たちがいる家族を、ジョーの僅かな給料で養うことは、よりいっそう難しかった。ジョーは週にたった65ドル程しか稼いでいなかったのである。ジャクソン家は支出に細心の注意を払うようになった。キャサリンは服を救世軍で買うか、自身で作った。食事はとても質素で、スープ、ポローニヤサンドイッチ、マカロニ、そしてチーズとスパゲッティだった。

¶⑪ ジョーの家族は、彼の音楽家としての経歴が成長するよりも素早く成長した。だから、彼はフルタイムのプロミュージシャンになるという夢を諦めなければならなかった。しかし、彼はギターを取って置いて、それでも時々バンドと一緒に演奏した。彼らが演奏した音楽のほとんどは、当時の有名な黒人音楽家、例えばリトル・リチャード、チャック・ベリー、オーティス・レディング、そしてジェームス・ブラウンによるものだった。

¶⑫ ジョーの3人の最も年上の息子たち、つまり、ジャッキー、ティト、そしてジャーメインは、ザ・ファルコンズが演奏するのを見るのが大好きだった。ときどきジョーがバンドと練習をしていない時には、ジョーは、キャサリンが家族を伝統的な歌を歌うのに導くのに合わせてギターを演奏した。キャサリンは彼女の子供たちがどれほど上手く歌えるのかということに喜びを感じていたし、マイケルが子供のときでさえ、彼女はマイケルが華麗に動けるということに気づいていた。ごく幼少期から、子供達は音楽に囲まれていたのである。彼らの成功はここから育った。「ジャクソン5は、こういう慣習から生まれたんだ」と、後にマイケルは語った。

¶⑬ ジョーは彼の子供たちに、厳しい規則を作った。最も重要な規則のひとつは、「俺のギターに触れるな」というものであった。しかし時々、キャサリンがキッチンで忙しい時、ティトは彼の寝室にギターを持って行った。そこで彼はラジオで流れていたどんな曲とも、一緒に合わせてギターを弾く練習をした。彼が弾いている間、ジャッキーとジャーメインは歌った。

¶⑭ マイケルは時々、ティトとジャーメインとジャッキーがギターを弾き歌っているのを見ていた。ある日、キャサリンは彼女の息子たちがジョーのギターを携えているのを見つけた。彼女は、もし彼らがギターの扱いに気をつけると約束するなら、ジョーに告げ口しないと言った。彼女は子供たちが音楽に興味を持っていること、そして、外でトラブルになっていないことが嬉しかったのである。そして、キャサリンが、息子たちにジョーのギターで遊び続けるのを許したのには、もう一つの理由があった。「私はやめてほしくなかったのよ」と彼女はあとになって説明した。「なぜなら、私はそこに大きな才能を見ていたから。」と。

¶15 ある日、ティトがギターを弾いていると、ギターの弦が一本壊れてしまった。ジョーは仕事から家に帰ってきて、壊れた弦を見ると、息子たちにそれについて尋ねた。初めは、息子らはその壊れた弦について、何も知らないと言った。しかし、ジョーは彼らを信じなかった。というのも、彼は真実を知っていたのだ。ジョーはとても腹を立てたのでティトは泣き出してしまった。その後、ジョーは落ち着き、男の子たちの部屋に入っていった。ティトはまだベッドの上で泣いていた。ティトは父に、「あのね、僕はそのギターを弾けるんだ。ほんとにできるんだよ。」と告げた。

¶16 ジョーはそのギターをティトに手渡した。「いいだろう。何が弾けるのか見せてみる」と言った。ティトは弾き始めた。ジャッキーとジャーメインがやってきて一緒に歌った。ジョーは息を呑んだ。ジョーは息子たちにこれほどまでの音楽的才能があるとは気づいていなかったのだ。その日、ジョーはあることを思いついた。彼には、そのアイデアが、彼と彼の家族をどんな所へと連れて行くのか、想像もつかなかった。

¶17 その翌日、ジョーは普段通りの時間に帰ってこなかった。キャサリンは心配になり始めた。やっとドアを開けて帰ってきたとき、彼は驚くべきプレゼントを持っていた。それはティトのための、ピカピカの赤いギターだった。ジョーはザ・ファルコンズの仲間と共に過ごす時間を減らし、息子たちに音楽を教える事により多くの時間を費やすようになった。彼は家にもっと多くの楽器を持ってきて、ファミリーバンドを結成することに尽力した。ティトとジャッキーはギターを弾き、ジャーメインは歌い、モーリーンとラ・トーヤはピアノとクラリネットを演奏した。時々、マイケルもその楽しみに参加した。マイケルは踊り、まだ幼な過ぎて理解できない言葉で歌った。

¶18 キャサリンは家族が一緒になって楽しく過ごしているのが嬉しかった。しかし、彼女はジョーが楽器に費やしていたお金が心配だった。そのお金は、彼らが食べ物や洋服を買うのに必要なお金だったのだ。時々ジョーとキャサリンは口論した。そのような揉め事では、ジョーがいつも勝った。ジョーは、ジャクソン家のファミリーバンドを作るという夢を断固として諦めなかった。夫は決断をしたら、もう絶対に考えを曲げない人であるということをキャサリンは分かっていた。

【授業風景】

- | | |
|---|-------------------------------------|
| ① ケイリーの生活環境は悪かった。 | ⑧ 家は11人しか住んでいなかった。 |
| ② ケイリーは「罪の街」と呼ばれていて、そこにジョー・シヤワソンとキャサリンが住んでいた。 | ⑨ 2つの寝室で11人が住んでいた。 |
| ③ ジョーは、教師の父親ゆかりで厳格だった。 | ⑩ シヤワソン家の生活は質素だった。 |
| ④ キャサリンと結婚する前、ジョーはボウチだった。 | ⑪ ジョーは夢をあきらめたが演奏は続けた。 |
| ⑤ マイケルの父親は厳しかったが母親は優しくかった。 | ⑫ シヤワソン家は音楽に囲まれていて、シヤワソンはここに由来する。 |
| ⑥ 両親は共に音楽が好きで、ジョーは音楽家に転職したかった。 | ⑬ テートは勝手に父のギターを演奏し、シヤワソンとシヤワソンは歌った。 |
| ⑦ シヤワソン家は大家族だった。 | ⑭ キャサリンは子供たちがギターを演奏するのを嬉しく思った。 |

⑮ ギターをこねたことがジョーにバツして怒られた。	<p>④ 反射</p> <p>大脳(意識)とは無関係に生じ、大脳以外の中枢で切り通す</p> <p><反射弧></p> <p>反射における興奮の伝達経路</p>
⑯ ジョーは息子たちの音楽を聴いてバンド結成を思いついた。	
⑰ ジョーは夢をあきらめてシヤワソン5に尽力し始めた。	
⑱ ジョーはシヤワソン家のバンドに全てかけた。	
	<p>(i) 99%反射</p> <p>ex. 屈筋反射</p> <p>介在神経：中枢にある</p>

【『多読で親しむ』第2講の和訳 L5共同作成(田中校正済み)】

【(2)：シェイクスピア著『ザ・トラジェディ・オブ・マクベス』の抄訳】

ダンカン王は、スコットランドの王であった。マクベスは偉大な領主でスコットランド軍の将軍だった。バンクォウもまた、領主であり、軍を率いていた。

マクベスはノルウェー軍との大戦に勝利した。マクベスとバンクォウは戦場からの帰還中、嵐の中、開けた荒れ地で馬を駆っていた。荒れ地のもっとも奥で、彼らは火の回りに座っている3人の魔女に出会った。その魔女たちは、ふたりを引き止めた。

「誰だ？」とバンクォウが尋ねた。「お前らは女性のようにも見えるが、しかし髭があるな。」

「申せ！」とマクベスが言った。「いったい何者だ？」

「ごきげんよう。グラミスの領主、マクベスよ」と1人目の魔女が言った。

「ごきげんよう。コーダーの領主、マクベスよ」と2人目の魔女が言った。

「ごきげんよう。マクベスよ。あなたはいずれ王になるでしょう。」と3人目の魔女が言った。

それから、その魔女たちはバンクォウの方を向いた。

「あなたは王にはならないでしょう。」と、3人目の魔女が言った。

「しかし、あなたの子供たちや、孫たちは代々の王になるでしょう。」

マクベスとバンクォウは、その魔女たちから、馬に乗って逃げ去った。

「私はすでにグラミスの領主だ。」とマクベスは言った。「しかし、どうして私がコーダーの領主になぞ、なれるというのか。というのも、コーダーの領主は、今もまだ健在ではないか。それに、私は自分が王になるだなんて、思わない。魔女たちは、君の子供たちが王になると言ったぞ、バンクォウよ。」ちょうどその時、ダンカン王からの遣いが、マクベスの元にやって来た。

「コーダーの領主は、ノルウェー人を助けました。」と、その使者たちのうちのひとりが言った。「コーダーの領主は、ダンカン王に謀反を起こしたのでございます。そして今、ダンカン王はあなたに、新しいコーダーの領主になって欲しいと望んでいます。」

「グラミスの領主、そしてコーダーの領主だと。」と、マクベスは驚き、バンクォウに言った。

「もし君が魔女たちを信じるなら、君は王になるだろう。」とバンクォウは言った。「おそらく魔女たちは本当のことを言っている。ひょっとして魔女たちは、災厄と死を引き起こしたいのではないだろうか。」

マクベスの城で、マクベス夫人は、夫からの手紙を読んだ。「魔女たちは、私の夫が王になるだろうと言っている。」と夫人は思った。「でも、マクベスはあまりにも優しくすぎるし、温厚すぎる。マクベスには、為さねばならぬことがあるのに、それらを為すのを、彼は怖がっている。私が彼に話しかけて、彼に勇気を出させなくては。」

そこへ、マクベスが城に到着した。「私の最愛の者よ。今夜ここに、ダンカン王が来るのだぞ。」とマクベスは言った。「ダンカン王は、私に栄誉を与えてくださるのだ。」

「いつ王は、お帰りになるの？」

「王は、明日帰ると言っていた。」

「まあなんてこと！王は絶対に帰ってはならないわ！マクベス、貴方は、考えていること、感じていることが面に出過ぎるの。それらは隠さなくてはなりません。全ては私にお任せになって。」

ダンカン王は二人の息子、マルカムとドナルベインを連れて、マクベスの城に到着した。夕食後、マクベスは皆で食事をとっていた広間を抜け出ていった。

「私が王になりたいのなら、私はダンカンを殺さなければならない。」と彼は考えた。「私はすみやかにダンカン王を殺さなければならない。でも、私がダンカン王を殺せば、何が起きるだろうか？このような行いは、私にも害を与えかねない。王は私の城の客人なのだから、私は王を殺すどころか、むしろ殺し屋どもから王を守らなければならない立場のはずだ。ダンカン王は善き王であるし、ダンカン王が死ねば、深い悲しみが襲うだろう。ああ、絶対にだめだ。私は決して殺すまい。」

ちょうどその時、マクベス夫人も食堂から抜け出てきた。「なぜ部屋から退出したのかしら？」と夫人は聞いた。

「私はダンカン王を殺したくないのだ。」とマクベスは言った。「ダンカン王は私に良くしてくれる。人々は私が好きで、私に憧れている。私は彼らからの善き評価を捨て去るわけにはいかぬのだ。」

それを聞いたマクベス夫人は夫に対して激怒した

「いったい何を言っているのかしら？」と夫人は言った。「なぜあなたはこんなに恐れているのかしら？あなたは王になりたいんでしょう。それなのに、王を殺すことを恐れているの？」

「私は勇敢な男だ。」とマクベスは応えた。「私は、男がすべきこと——全ての正しいこと——はなんだってやるのだ。」

「だが、もし我々が失敗したら、その時には何が起こるだろうか？」

「その時は失敗するだけよ！」とマクベス夫人は言った。

「でもね、もしもあなたが本当に勇敢だというなら、私達は成功するわ。ダンカン王が眠るまで待ちましょう。皆には、王の召使いが彼を殺したのだと信じこませるのです。私は召使いらを眠らせるために、薬を彼らの飲みものに入れ、そして私たちで、彼らに王の血を塗りたくってやるのです。」

「ああ、そうしよう。」とマクベスは言った。「だが、私達は親切で上機嫌であるように見えなければならぬ。そうすれば、誰も私達の計画に気づかない。」

そこへ王とその二人の息子が食堂から出てきた。王は疲れていたもので、はやくに眠りについた。

その夜遅く、バンクォウとその息子フリーアンスは城の庭でマクベスに会った。

「これは、王からあなたの奥方へ贈られた美しい宝石です。」とバンクォウは言った。「王はもう寝てしまった。」とマクベスは言った。

深夜が訪れた。マクベス夫人が王の召使いたちの飲み物を作ったので、彼らは何も気がつかなかった。夫人は短剣を取って王の寝室に向かった。ダンカン王は、長旅で疲れ、熟睡していた。眠るダンカン王の顔はマクベス夫人に、彼女の父の面影を思い起こさせてしまい、彼女は王を殺せなかった。それゆえ彼女は立ち去った。

マクベスは彼の手中の短剣を見つめた。「魔女達は本当のことを言ったのだ。私は王の部屋に行って彼を殺さなければならない。」とマクベスは思った。マクベスが王の部屋から出てきたとき、彼は次のように言った。「何か聞こえたか？何か話したか？私は声を聞いたと思う。その声は言った。「マクベスが眠りを殺してしまった。マクベスはもう二度と眠ることは無いだろう。」と。」

「私には何も聞こえなかったわ。」とマクベス夫人は言った。「あなたの思い込みよ。さあ、水を取って、手についた血を洗いなさい。どうして短刀をここまで持ってきてしまったの。その短刀は王の寝室に置いてこないといけないのよ。短刀を戻してきて、寝ている召使いたちに血をつけておいでなさい。」

「私にはあの部屋に戻り、また王の遺体を見ることなど出来ぬ。」とマクベスは言った。「怖いのだ。」

「あなたは弱いわ。」とマクベス夫人は言った。「その短刀をよこしなさい。私が召使いたちの上に血を降らせてくるわ。」

夫人が戻ると、彼女は自分の両手をマクベスに見せた。「さあ見なさい！私の手は、あなたの手と同じくらい赤い。でも、私の心はあなたの心ほど、恐怖で青白くなってなどいないわ。さあ、寝巻きに替えなさい。私たちは人々に眠っているのだと思って貰わなければならないのよ。」

突然、城の大門に騒々しいノックが響いた。

「なんなんだ」とマクベスは叫んだ。「いまや全ての音が私を慄かせる」とマクベスは言った。マクベスは自分の血塗れた両手を見た。「ああ、私の手！全ての海の水でさえ、この手についた血は洗い落とせまい！」

人々はまだ門を叩いていた。マクダフとレノックスという2人のスコットランド領主もやってきた。マクベスは彼らに挨拶しようと、出ていく。

「王は起きられたか？」とマクダフが尋ねた。

「まだ起きられていないが、あなたを王の部屋に連れて行ってやろう。」

マクダフは王の部屋へ入った。そのすぐ後、彼は大声で叫びながら飛び出てきた。

「何があった？」とレノックスが尋ねた。

「ああ、恐ろしすぎる！ただちに、マルカムとドナルベインを起こせ。城の鐘を鳴らせ。」とマクダフが叫んだ。そこへバンクォウが入ってきた。「ああ、バンクォウ、バンクォウ！」とマクダフは嘆いた。

「私たちの王が、死んだ！！！」

ダンカン王の息子たち、マルカムとドナルベインは、彼らの部屋から出てきた。

「どうしたのだ」とドナルベインが尋ねた。

「あなたの父王が、死んでしまったのです！」とレノックスは言った。「私たちは、王の召使たちが彼を殺したと考えています。彼らが血にまみれていたからです。」

「我々は問い続け、その答えを見つけようとしなければならない。」とバンクォウは言った。「しかしこれは血なまぐさい仕事だ。いったいこのことにどういう意味があるのだろうか？」

王の2人の息子たちは恐れ慄いた。いったい、彼らに誰が信用できるというのか。

「私はこれからイングランドに亡命する。」と、マルカムは言った。「この城の中の誰かが父上を殺したんだ。そいつらは、ただ悲しんでいるふりをしているだけだ。」

「私はアイルランドに亡命する。」とドナルベインは言った。「我々はここにいるより、異国にいた方がまだ安全だろう。」

その夜から、スコットランドでは、奇怪でぞっとするようなことが相次いだ。皆の心に漆黒の恐怖が生まれた。

バンクォウはマクベスを信用してなどいなかった。「今やマクベスは全てを手中に収めた。」と彼は彼自身に言い聞かせた。「ダンカンが死んだことで、マクベスは王になる。王、コーダー、グラミス。マクベスは魔女たちが約束した全てになった。しかし魔女どもは、私にも何かを約束した。私は代々の王の父となるらしい。それは果たして本当か。」

マクベスとマクベス夫人は、祝宴に人々を招いた。「フリーアンスと私は、午後は馬を駆りに外へと出掛けなければならない。」とバンクォウは言った。「しかし宴には戻るつもりだ。」

「良かるう。」とマクベスは返答した。「イングランドとアイルランドにいるダンカンの息子たちは、父親の殺害者について嘘を言っていると聞いたぞ。」

そして部屋に誰もいなくなった時、マクベスは召使いを呼んだ。「城門の外で待っている二人の男を中へ入れてやりなさい。」と彼は言った。

「魔女たちは、バンクォウの息子たちはスコットランドの代々の王になるだろうと言っていた。」とマクベスは自分に言い聞かせた。「ということは、私は自分のためではなく、むしろバンクォウと彼の息子たちのために、この王殺しというおぞましいことをしてしまったことになる。バンクォウは死ななければならない。そしてフリーアンス、彼の息子も、死ななければならない。」

そして二人の男が中に入ってきた。彼らは殺し屋であった。

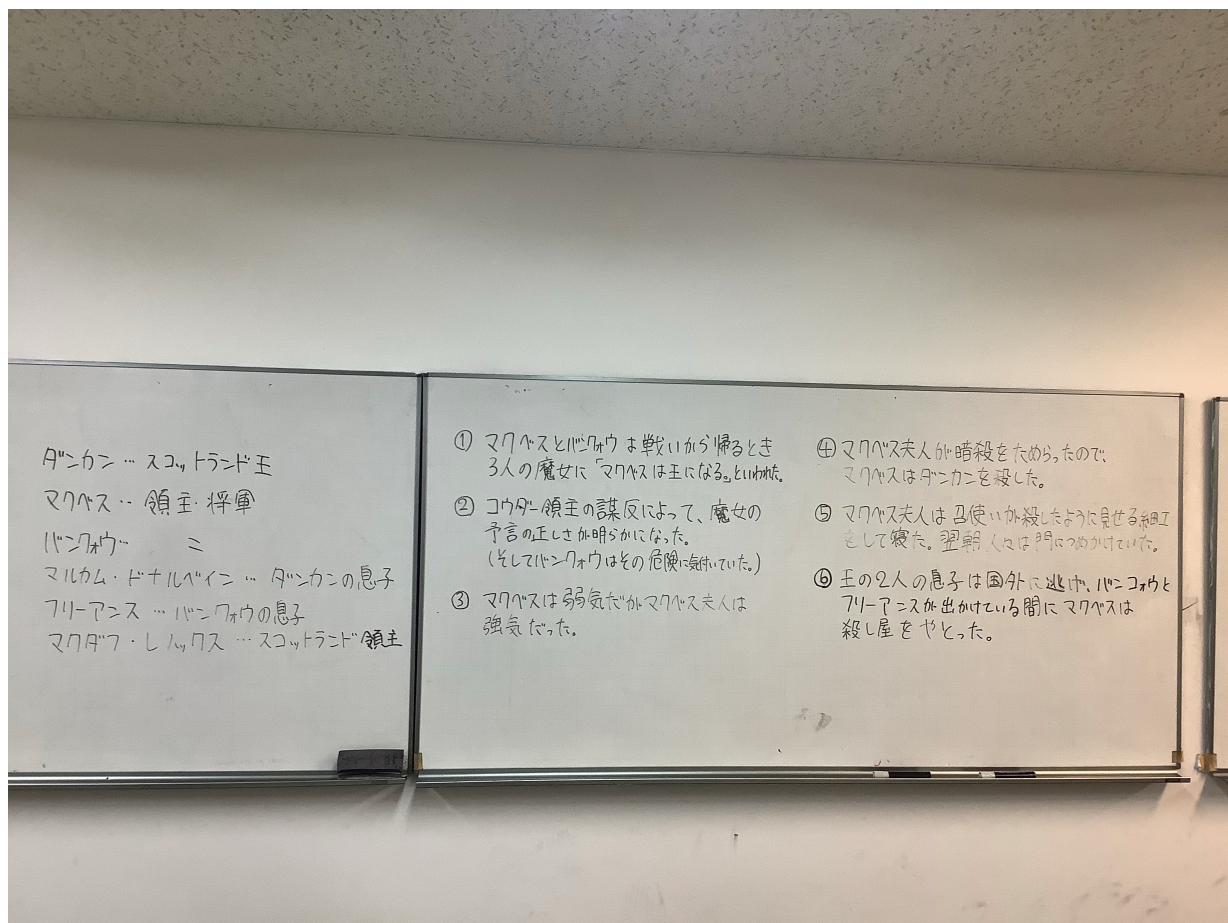
「お前らの敵はバンクォウである。」とマクベスは言った。「バンクォウは私の敵でもある。貴様らはバンクォウを殺さねばならない。彼とその息子を捕まえるために、貴様らが待ちぶせできる場所を指示してやろう。」

宴が始まる前に、マクベス夫人は夫に話しかけた。

「あなたは一人の時間を過ごしすぎだわ。」と夫人は言った。「あなたの唯一の友は、あなたの悲痛なお考えだけ。心を病んでも、もう遅すぎる。ダンカンが死んでしまったんだもの。」

「我々は、まだ危険だ。」とマクベスは応えた。「我々はどちらも毎夜ひどい夢ばかり見ている。死人どもが安らかに眠っている中、生きている私は恐怖でいっぱいだ。」

【授業風景】



【『多読で親しむ』第3講の和訳 L5共同作成(田中校正済み)】

【(3)：マーク・トウェイン著『カリフォルニア人物語』】

若い頃、私はカリフォルニアに金を探しに行った。私は自分が金持ちになるのに十分な量の金を見つけることはできなかったのだが、しかし私は、ひととき美しい土地を見つけた。そこは、「スタニスラウ」と呼ばれていた。スタニスラウは、地上の楽園のようだった。優しい風が木々に触れる、明るい緑の丘と深い森がそこにはあった。

他の人々も金を探しており、私が到着するより何年も前に、カリフォルニアのスタニスラウの丘に既にたどり着いていた。彼らはその谷に歩道や店、銀行、学校などがある町を建設した。彼らはまた、自分の家族のために愛らしい小さな家を建てていたのだ。

最初、彼らはスタニスラウの丘でたくさんの金を見つけた。しかし、彼らの幸運は、長くは続かなかった。数年後、金が尽きたのである。私がスタニスラウに着く頃までには、すべての人々もまた、いなくなっていた。

今では道々に草が生えている。そして、その小さな家々は野バラの木で覆われていた。はるか前のあの夏の日、私が誰もいない町の中を歩いていると、虫の音だけが空気を満たしていた。ちょうどその時、私はやはり一人ではないのだということに気づかされた。

ある男がその小さな家々の一つの前に立ち、私に向かって微笑んでいたのである。この家は野バラの木に覆われてはいなかった。その家の前の小さく素敵なお庭は青や黄色の花々で満ちていた。白いカーテンが窓にかかっており、柔らかい夏の風に揺れていた。

その男は、まだ微笑みながら、家のドアを開けて、私に身振りでも合図した。私はその家の中に入り、目を疑った。私は何週間もの間、他の金採掘者たちと、不快な採掘場に住んでいた。私たちは固い床の上で寝て、冷たい金属皿から缶詰の豆を食べ、金を探す困難な日々を過ごしていた。

この小さな家の中では、私の心が再び生き返ったようだったのだ。

私はピカピカの床の上の、綺麗な絨毯を見た。写真が部屋の至る所に吊るされていた。そして、小さなテーブルの上には、貝殻や本、花々が詰まった陶器の花瓶が置かれていた。ある女性がこの家を「わが家」に一変させていたのであった。

私の心の内の喜びが、私の顔にも露われていたにちがいない。その男は私の心を読んだ。「そうなんです。これらは全て彼女のおかげなんです。この部屋の中にあるもの全ては、彼女の手になるものなんです。」と彼は微笑んだ。

壁にかかった写真のうちの一つは真っ直ぐに吊るされていなかった。彼はそれに気がつき、そしてそれを直しに行った。彼はその絵が本当に真っ直ぐになっているかを確認するために何度か一歩退いて、距離を置いてみていた。それから彼は、その絵に彼の手で優しく触れた。

「彼女はいつもこうするんです。」と彼は私に説明した。「この触れ方は、母親が子供の髪を梳かしたあとで、仕上げに撫でてやるのに似ているんです。私は彼女がこれらを直すのをよく見ていたから、彼女がやるのと同じようにできるんです。自分がなぜこんなことをしているのかは分からない。でも、とにかくやっているんです。」

彼が話している間、私は、彼が私に気づいて欲しい何かがある、この部屋の中にあるのだらうと分かった。それで私は辺りを見渡してみた。私が暖炉の近く、部屋の隅に目をやった時、彼は突然幸せそうに笑い、うれしくて両手をこすり合わせた。

「それぞれ！」と彼は叫んだ。「とうとう見つけちゃいましたね。見つけるかと思っていました。それが彼女の写真ですよ。」私は、それまで見た中でいちばん美しい女性の小さな写真が飾ってある、小さな黒い棚の方へと歩み寄った。女性の表情には、かつて私がみたことのないような甘美さ、そして優しさがあった。

その男は私の手から写真を取り、その写真を見つめた。「彼女は前の誕生日で19歳になったんです。それは私たちが結婚した日です。あなたが彼女に会ったら…。あ、彼女に会えるまで待っていてくれませんか！」

「彼女はどこにいるんですか？」と私は尋ねた。

「ああ、彼女は今出かけているんです。」と彼は写真を小さな黒い棚に置きながら身振りで示した。「彼女はご両親に会いに行ったんです。ご両親はここから40マイルか50マイル離れたところに住んでいて、彼女は今日で2週間、出かけています。」

「いつ帰ってくるんです？」と私は尋ねた。

「えーと、今日は水曜日、ですね。」と彼はゆっくりと言った。

「彼女は土曜日に帰ってきます。土曜の午後です。」

私は強い落胆の念を抱いた。「ああ、ごめんなさい。私はそれまでにはここを去るつもりなんです。」と私は言った。

「去るですって？だめです！なぜあなたは行かなければならないんですか？行かないでください。彼女はとても残念に思うでしょう。だって、彼女は人々を招いて、一緒に過ごしてもらうのが好きなんです。」

「でも、私は本当に行かなければならないんです。」と私はきっぱりと言った。

彼は彼女の写真を拾い上げ、私の目の前でそれを持った。「これです」と彼は言った。「さあこの写真に映る彼女の顔に向かって、自分は彼女に会うためにここにとどまることもできたのに、それでもあえてそれをしなかった、と言ってもらえますか。」

2度目にその写真を見たとき、何かが私を心変わりさせた。それで私はここにとどまることを決めた。

その男は私に、自分の名前はヘンリーだと言った。

その夜、ヘンリーと私は、主に彼女についてではあったが、たくさんのことについて話した。次の日は、静かに過ぎていった。

木曜の夕方、私たちには来客があった。その客は大きく、白髪で、トムという名の坑夫であった。「いつ彼女が家に帰ってくるのかを尋ねに、ちょっと数分だけ寄ったんだ。」とトムは説明した。「何か知らせはあるかい？」

「ああ、あるよ。」とヘンリーは答えた。「手紙を受け取ったんだ。聞きたいかい？」

ヘンリーは黄色の手紙をシャツのポケットから取り出し、それを私達に読んで聞かせた。その手紙は、ヘンリーと他の人々、つまり彼らの親友や隣人たちへの愛のこもったメッセージでいっぱいだった。ヘンリーが手紙を読み終えたとき、ヘンリーは彼の友達を見つめた。「おいおい、またじゃないか、トム！私が彼女から来た手紙を読むとき、君はいつも泣いてしまう。今度こそ彼女に伝えてしまうからね！」

「ああ、君はその手紙を読んじゃいけないぞ、ヘンリー。」とその白髪の鉱夫は言った。「私はどんどん老いている。だから、どんなちょっとした悲しいことでも涙が出てしまうんだ。私は彼女が今夜ここにいることを本当に願っていたんだよ。」

その翌日の金曜日、別の老いた鉱夫が訪ねて来た。彼は手紙の内容を聞かせてくれと頼んだ。それを聞くと、彼も泣いた。「私たちはみんな、こんなにも彼女が恋しいんだ」と彼は言った。

土曜日が、ついにやってきた。私は、気づくとしょっちゅう腕時計を見ていた。ヘンリーはこのことに気がついた。「彼女に何かが起こったのだと思っているんじゃないですか？」と彼は私に尋ねた。

私は笑って「彼女はきっと大丈夫ですよ」と言ったが、彼は満足しているようには見えなかった。

ヘンリーの友人のふたり、トムとジョーが、日が沈み始めたころにやってきて、私は彼らに会えたのが嬉しかった。その老いた鉱夫たちは、ギターを持ってきていた。それから彼らは、花々とウイスキーのボトルも持ってきていた。彼らは花瓶に花をさし、素早く生き生きとした曲をギターで弾き始めた。

ヘンリーの友人たちはヘンリーにウイスキーのグラスを与え続け、そしてそれをヘンリーに飲ませた。私が机の上に置かれた2つのグラスのうちのひとつに手を伸ばした時、トムが私の手を止めた。「そのグラスから手を離して、そっちのを取ってくれ！」と彼はささやいた。ちょうど時計が深夜を告げたとき、トムはヘンリーに残されたウイスキーのグラスを渡した。

ヘンリーはそのグラスを空にした。ヘンリーの顔はどんどん白くなっていった。「なあ、気分が悪いんだ。横になりたい。」とヘンリーは言った。

ヘンリーはほとんどそう言い終わらないうちに、眠ってしまった。

すぐさま、ヘンリーのふたりの友人は彼を持ち上げて寝室へと運んだ。そして彼らが寝室の扉を閉じて、戻ってきた。彼らはここから去る準備をしているように見えた。だから私は、「皆さん、行かないでください。彼女は私を知らないでしょう。私は彼女にとって見知らぬ人なのです。だからここにいてください。」と言った。

彼らはお互いに目を見合わせた。「ヘンリーの奥さんは19年前に死んだんですよ」と、トムは言った。

「死んだ、ですって?」と私はささやいた。

「死んだか、あるいはもっと悪いか。」とトムは言った。

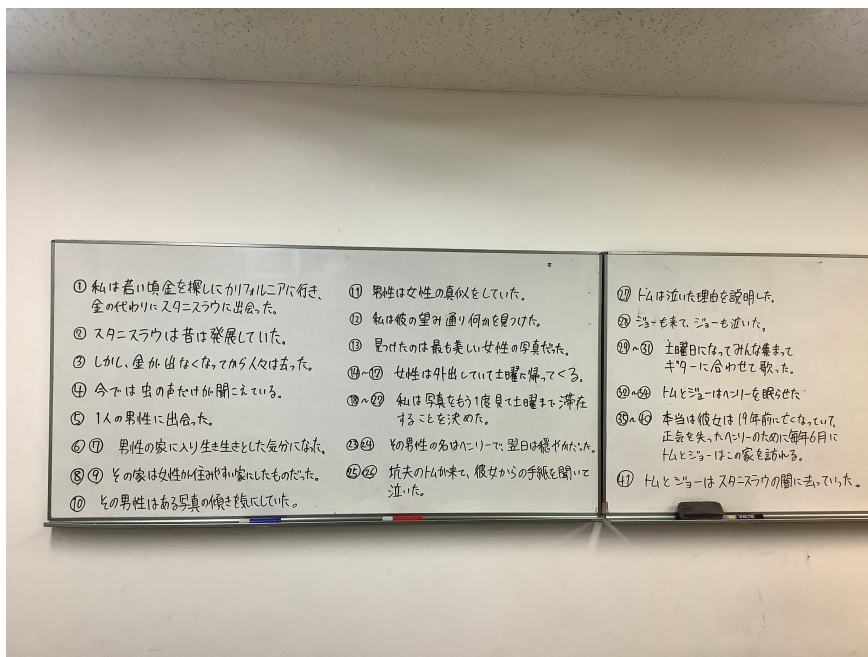
「彼女は、結婚した約半年後、彼女の両親に会いに行ったんです。6月の土曜の夕方、帰り道のことでした。彼女はほとんどこのあたりまで来ていたんですが、そこで先住民達が彼女を捕らえたんです。それ以来、誰も彼女を目にしません。ヘンリーは正気を失いました。ヘンリーは、彼女がまだ生きていますと思っています。だから6月になると、ヘンリーは彼女が両親に会いに行くために、旅に出てしまったのだと思ひこむようになるんです。そしてヘンリーは、彼女が帰ってくるのを待ち始めます。彼はあの古い手紙を取り出すのです。そして、彼がその手紙を私たちに読んで聞かせることができるように、私達はここへ立ち寄りにやってくるのです。」

「彼女が帰ってくるはずの土曜の夜に、私達は彼と一緒に過ごすためにここへ来るのです。私達は、彼が一晩中眠れるように、睡眠薬を彼の飲み物に入れてあります。こうすれば、彼はもう一年、大丈夫なのです。」

ジョーは彼の帽子とギターをとった。「私達はこれを19年間にわたって、毎年6月にやってきたんです。」とジョーは言った。「最初の年には、27人の仲間がいました。今やたった2人だけが残されました。」

そう言って、彼はこの愛らしく小さな家の扉を開けた。そして、この2人の年老いた男たちは、スタニスラウの闇の奥へと消えていった。

【授業風景】



【『多読で親しむ』第4講の和訳 L5共同作成(田中校正済み)】

【(4)：オー・ヘンリー著『最後の一葉』】

多くのアーティストがニューヨークのグリニッジビレッジ地区に住んでいた。スーとジョンジーという2人の若い女性が、3階建ての建物の一番上の階のワンルームと一緒に住んでいた。ジョンジーの本名はジョアンナといった。

11月のことであった。冷たくて目に見えないよそ者が、この街を訪れた。この病気、そう、肺炎は、多くの人々を殺したのである。ジョンジーはベッドに横になって、ほとんど動かなかった。彼女は小さな窓越しに外を見ていた。彼女には、隣のレンガ作りの建物の壁を見ることができたのである。

ある朝、医者がジョンジーを診察し、体温を測った。それから医者は別の部屋でスーと話した。

「彼女が助かる見込みは、そうだな、十に一つといったところか。」と医者は言った。

「そして、その好機というのはね、彼女が生きたいと思うことなんだよ。君のお友達のジョンジーはね、自分が元気にならないと、決めてかかっているんだ。あの子には、何か心残りになるようなものはあるかな？」と医者は尋ねた。

「えっと、彼女はそう、彼女はいつか、イタリアのナポリ湾を描きたいと言っていましたわ。」とスーは言った。

「絵だって？」と医者は言った。

「そんなんじゃ全然ダメだ。もっと、この世に思いとどまるに値するような、そういう何か、彼女にはないだろうか。例えばそう、男とか？」

「男ですか？男が大事なんですか？でも、いませんわ先生。そういう男は、いないのです。」と、スーは言った。

「私は科学にできる全てのことはするつもりだ。しかしだね、これまでの経験から言うと、私の担当する患者が自分の葬式に、車がどのくらいくるのかを数え始めるような時にはいつだって、薬の治癒力は半減すると、私は思っているのだよ。」

その医者が去った後、スーは仕事場に入って、泣いた。そして、彼女はスーを気遣って、ラグタイムを口ずさみながら、画板を持ってジョンジーの部屋に行った。

ジョンジーは、窓に向かって顔を向けながら、横になっていた。スーはジョンジーが寝ていると思って、口笛をやめた。スーは、ペン画で、雑誌内の物語のための挿絵を描き始めた。若い芸術家というのは、こうやって雑誌内の物語のために絵を描くことによって、正真正銘の「アート」へと続く下積み時代を経ねばならないのだ。スーはジョンジーが何度も繰り返し低い声で唸るのを聞いた。それでスーは素早くベットサイドに駆け寄った。

ジョンジーの目は大きく見開いていた。ジョンジーは、窓の外を眺め、そして数を逆から数え始めた。

「12」とジョンジーは言った。そして、少し遅れて「11」と言い、それから「10」「9」、そして「8」と「7」をほとんど続けて言った。

スーは窓の外を見た。ジョンジーは、何を数えているのだろうか。外には、空っぽの庭と、7メートル離れた所にある家の、何も書かれていない壁面しかなかった。根もとが腐っている古びたツタが、その壁の半分までを這い上がっていた。秋の冷たい風は、葉っぱをツタから落としており、とうとうその枝はほとんど丸裸になって、レンガにしがみついているのであった。

「何をしているの？」とスーが聞いた。

「6」とジョンジーが静かに言った。「落ちるのがどんどんはよくなっているわ。3日前には、ほぼ100枚あったの。数えたら頭が痛くなったわ。でも、今は数えるのも楽になったわ。あ、もう1枚落ちた。今はもう、5枚しか残ってない。」

「5枚の何よ？」とスーが聞いた。

「葉っぱよ。あの植物についてるやつ。最後の1枚が落ちた時、私もいくんだわ。3日前から気づいていた。お医者さん、あなたに言ってなかった？」

「あら、そんなこと聞いたことないわよ。」とスーが言った。「古いツタの葉っぱが、あなたの回復と何の関係があるというの？それに、あなたはあのツタが好きだったじゃない。バカ言わないで。あのね、お医者さんが今朝言ってたのは、あなたがすぐに回復する見込みは、えっと、彼が言ったことを正確に引用すると、彼は「十中八九大丈夫だ」って言ってたのよ！今はスープを飲んでなさい。それで、私は絵に戻るわね。そしたら、これを雑誌社に売って、食べ物とワインが買えるわ。」

窓の外に目をやったまま「これ以上ワインを買う必要なんて無いのよ。」とジョンジーは言った。

「あ、また1枚落ちた。もう、スープも要らないわ。あと4枚しかないんですもの。暗くなる前に、最後の1枚が落ちるのが見たいわ。そしたら、私も一緒にいくのよ。」

「もう、ジョンジー」とスーが言った。「目を閉じて、私が仕事を終えるまで、窓の外を見ないって、誓ってくれる？明日までにこれらの絵を雑誌社に出さなくちゃいけないの。」

「終わったらすぐに教えてね。」と言って、ジョンジーは目を閉じた。彼女は倒れた像のように白く動かず、横になっていた。「最後の1枚が落ちるのを見たいの。もう待ちくたびれたわ。考えるのもうんざりよ。全てのことに對する気がかりを手放して、ちょうどあの可哀想な、くたびれた葉っぱたちのひとつのように、下へ下へと降りて行きたいの。」

「いいから眠るのよ。ああそうだ。私はベアマンさんに、私の描いている老坑夫の絵のためのモデルになってくれるように、電話でお願いしてこなくちゃ。私が帰ってくるまで、ここから動いちゃダメよ。」とスーは言った。

年老いたベアマンという人物は、このアパートの1階に住んでいる画家であった。ベアマンは、芸術の世界では、てんで芽が出ない人であった。何年もの間、彼はいつも作品を描くことを計画してきてはいたのだが、それがいつも計画どまりで、実際に取り掛かることは絶えてなかった。ベアマンは、プロのモデルを雇えない芸術家たちのためにモデルを務めることで、小銭を稼いでいた。彼は、上の階のワンルームに住む二人の若い女性を保護している、いかつくて、小さくて、老いた男だったのである。

スーはベアマンが部屋にいるのを見つけた。最初のひと筆が乗るのを25年間も待ち続けている真っ白なキャンバスが、部屋の一角にはあった。スーはベアマンに、ジョンジーについて伝え、自分がどれだけジョンジーが葉っぱのように散ってしまうかもしれないということを恐れているのかを伝えた。

老いたベアマンは、そのような考えを聞いて憤慨した。「葉っぱがツタから落ちるから死ぬだなんて、そんな馬鹿げたことを言う人がいったいどこにいる？どうしてそんなおかしなことをジョンジーに思わせたままにしているんだい？」

「ジョンジーは今、すごく具合が悪くて弱っているの。そして、例の病気が、彼女の心をおかしな考えでいっぱいにしてしまったのよ。」とスーは言った。

「ここは、ジョンジーちゃんみたいな良い子が寝込むような場所ではないんだ！」とベアマンは声をあげた。「いつの日か、ワシが傑作を描いて、そしてここをみんなまで出ていくんだ。」

彼らが階上に行くと、ジョンジーは眠っていた。スーは窓を隠すために、日よけを下ろした。スーとベアマンは別の部屋へ入った。彼らは、びくびくしながら窓の外のツタを見た。そのとき、彼らは、黙って目を見合わせた。雪混じりの、冷たい雨が降っていた。それからベアマンは座り、坑夫としてポーズをとった。

翌朝、スーは1時間だけ寝てから、目覚めた。スーはジョンジーが日よけに覆われた窓を、ぱっちり目を開けて、見つめているのに気がついた。

「日よけを開けて。見たいの。」とジョンジーはそっと頼んだ。

スーはそれに従った。

日よけをあげると、叩きつけるような雨と、夜じゅう吹き荒んだ激しい風にもかかわらず、まだツタの葉が1枚だけ、壁にもたれていた。それはそのツタに残された、最後の葉だった。中心はまだ濃い緑色で、しかしふちの部分はもう黄色に染まっていた。その葉は、地面から7メートルくらいのところにある枝に勇敢にぶら下がっていたのである。

「あれで最後よ」とジョンジーは言った。「昨夜の間にきっと落ちるだろうと思っていた。強い風の音が聞こえていたもの。でも、今日には落ちて、私も同時に死ぬのね。」

「お願いよ。あなたがもう自分のことはどうでもいいっていうのなら、私のことを考えて。あなたがいなくなったら、いったい私はどうすればいいの？」とスーは言った。

疲れきった顔をベッドにあずけて、スーが尋ねたこの問いに、ジョンジーは答えなかった。

その翌朝、明るくなると、ジョンジーは窓の日よけを上げて、と要求した。最後の葉は、まだそこにあった。ジョンジーは、長い間横たわって、その葉を見ていた。それから彼女はスーを呼び出した。スーはチキンスープの準備をしていた。

「私が悪かったわ。」とジョンジーが言った。「何かが、あの最後の葉っぱをあそこにとどまらせたのね。私がどれだけ間違っていたのかを示すために。死を望んではいけなかった。今なら、少しスープを飲めそうよ。持ってきてくれるかしら。」

1時間後、ジョンジーは言った。「いつか、私はナポリ湾を描きたいわ。」

その日の午後には、あの医者がやって来て、スーは廊下で話をした。

「ごぶごぶだな。」と医者は言った。「気配りをしっかりすれば、大丈夫だろう。今はむしろね、私はこの建物の他の患者を見なければならなくなっただ。たしかベーアマンとかいう、ある種の芸術家だっと思う。同じく肺炎でね。彼は老いていて弱いから、彼の状況はいっそう深刻だよ。痛みを少しでも軽くするために、彼は今日病院に行くんだが、彼にはもう助かる見込みはないと思うね。」

翌日、医者はスーに言った。「ジョンジーはもう危機から脱した。君らは病気に勝ったんだ。今必要なのは栄養と気配り、それだけだ。」

午後、スーはジョンジーが寝ているベッドに行って、彼女を抱き抱えるように腕をまわした。

「あなたに伝えなければならないことがあるの、白ねずみちゃん。」とスーは言い、そして次のように続けた。

「ベーアマンさんが今日、病院で肺炎のため亡くなったわ。病気になってから、たった2日しか経っていないのに。1日目の朝、下の階の彼の部屋で、痛みでどうすることも出来ないでいる彼が見つかったそうよ。彼の靴や服は完全に濡れていて、氷のような冷たさだった。こんな悪天候の夜に、いったい彼がどこにいたのか、みんな想像も出来なかったそうよ。」

そしてそのとき、彼らはまだ火が灯っている、ランタンを見つけたの。そして彼らはいつもの場所から動かされた、はしごを見つけた。画材と、緑と黄色の絵の具が乗った画板も。

ほら、窓の外をご覧ください。あの壁のツタの最後の葉を見て。なぜ風が吹いても、あの葉が決して動かないのか、不思議に思わなかった？そう、あれがベーアマンさんの傑作よ。最後の葉っぱが落ちた夜、彼があそこにあれを描いたの。」

【『多読で親しむ』第5講の和訳 L5共同作成(田中校正済み)】

【(5)：エリス・パーカー・バトラー著『ブタはブタ』】

インター・アーバン・エクスプレス社の職員マイク・フラナリーは、ウエストコートにある同社のオフィスで、机の上に身を乗り出し、拳を振った。一方、モアハウス氏のほうは、真っ赤になって怒り、机の反対側に立って、怒りにうち震えていた。口論は長く、熱くなっていた。そしてついに、モアハウス氏は言葉を失った。

問題の発端が、二人の男の間、机の上に乗っていた。そう、モルモット(英語ではギニアの豚：guinea pigs)が2匹入った箱である。

「ならば、お好きなようになさってください！」とフラナリーは叫んだ。

「金を払ってこの箱を持って行くか、あるいは金を払わずにここに置いていくか、どちらかです。規則は規則ですからね、モアハウスさん。そして私、マイク・フラナリーは、規則を破ることはないのです。」

「ああ、この馬鹿者！」とモアハウス氏は怒鳴り、フラナリーの鼻先で薄い規則集の本を振り回した。

「あんた自身が持っているこの輸送料金の本、この中に書いてあるこれが読めないのか？ペットで、家庭用で、フランクリンからウエストコートまでで、正しく箱詰めされていれば、一匹25セントとある。」

彼はその本を机の上に放り投げた。「これ以上何が欲しいんだ？これらはペットじゃないのか？これらは家庭用じゃないのか？正しく箱詰めされていないっていうのか？なんだっていうんだ？」

モアハウス氏は怒りの表情を浮かべ、振り返って素早く行ったり来たりした。「ペット。ペットだ！それぞれ25セントだ。25セントの2倍は50セントだ。理解できるか？私はあなたに50セントを支払うんだ。」とモアハウス氏は言った。

フラナリーは規則集に手を伸ばした。彼はそのページをめくり、64ページで手を止めた。

「私は50セントをお受け取りすることはできません。」とフラナリーは、不愉快な声で囁いた。「ここに、それについての規則があります。それによると、「もしも職員が、二つの料金のどちらが輸送品に課せられるべきなのかについて、いかなる疑いであれ、疑いを抱いた場合には、高い方の料金を課さなければならない。受け取り人は、過剰料金についての損害賠償を請求してもよい。」とある。そして今回の場合、モアハウスさん、この私が疑っていることになる。そしてこれらの動物は、ペットでしょう。そして、家庭用でしょう。しかしですね、私はこれらが豚だということを確信しているのです。そして、私の規則は、あなたの鼻のように明白に、述べています。「豚、フランクリンからウエストコートまで、一匹あたり30セント」とね。」

モアハウス氏は頭をぶんぶん振った。「ああ、馬鹿げている！」と彼は叫んだ。「全く馬鹿げていると私は君に言っているんだ！そのルールは「普通の」豚を意味しているんだ。「ギニアの」豚のことではないのだ！」

「でも、豚は豚さ。」とフラナリーはきっぱりと言った。

モアハウス氏は悔しそうに唇を噛み、腕を乱暴に振り出した。「よろしい！」と彼は叫んだ。「思い知らせてやるからな！君のところの社長に、この件を聞かせてやる！全くひどい仕打ちだ！私は君に50セントを申し出たのではないか。君はそれを拒んだ。50セントを受け取る準備が出来るまで、その豚を持っておくがよい。ただし、そうとも、その豚の頭の毛がたった1本でも傷ついたら、私は君を告訴するからな！」と叫ぶと、彼は踵を返して歩き去り、ドアをボタン、と閉めた。フラナリーは机から慎重に箱を持ち上げ、すみに置いた。

モアハウス氏はすぐさまその運送業者の社長に手紙を書いた。社長は、過剰料金についての損害賠償請求は全て、損害査定部に送られるべきことになっているという旨の返事をした。

それでモアハウス氏は、損害査定部に手紙を書いた。彼が返事を貰ったのは、それから1週間後のことだった。損害査定部は、ウエストコートの職員とその問題について話し合った、と手紙に書いてきた。ウエス

トコートは職員フラナリーが言うには、モアハウス氏は彼に宛てて輸送されてきたモルモット2匹を受け取るのを拒んだそうだ。それゆえ、損害査定部が言うには、モアハウス氏は運送会社そのものに対する要求はないのだから、むしろ料金部の方に手紙を書くべきだという。

それでモアハウス氏は料金部に手紙を書いた。モアハウス氏は、この件を簡潔に説明した。料金部の部長はモアハウス氏の手紙を読んだ。「はんっ！モルモットか。恐らく今ごろには餓死しているだろうな。」と部長は言った。部長は職員フラナリーに対して、何故発送が滞っているのかを尋ねる手紙を書いた。部長はモルモットがまだ元気であるのかどうかも知りたかった。

返事をする前に、職員フラナリーは、自分の報告書が確実に最新の状態を告げるようにしたくなった。だから彼は事務所の裏へ行き、ケージの中を覗いてみた。すると驚いたことに、モルモットは今や8匹になっていたのだ！全員が元気で、カバのように餌を食べていた。

フラナリーは事務所に戻って、料金部の部長に、ルールが豚についてはどう規定しているのかを説明した。そしてモルモットの体調については、フラナリーは、みんな元気であったと報告した。だがしかし今や、8匹のモルモットがいて、みんな食欲旺盛なのだ。

料金部の部長は、フラナリーの手紙を読んで、最初は笑った。だが、手紙を読み返してみると、今度は真面目になった。

「いかにも！フラナリーが正しい。たしかに豚は豚だ。私はこのことについてなんらか、公式の根拠がなければならぬだろう。」と部長は言った。彼は、社長に話した。社長はこの問題を軽く扱った。「豚に対する料金と、ペットに対する料金はそれぞれいくらかね？」と社長は尋ねた。

「豚は30セントで、ペットは25セントです」と部長は答えた。「その場合、もちろんギニアの豚は豚だな。」と社長は言った。

「はい。」と部長は同意を示した。「私も同じように思います。ふたつの料金種別のどちらにも該当するようなあるものについては、当然高い方の料金が課せられるべきです。しかし、「モルモット」は豚なのではないでしょうか？むしろウサギではないのですか？」

「考えてみると、確かにモルモットは、むしろウサギに似ていると思うね。豚とうさぎの、いわば中間だ。私が思うに、ここで問題になっているはむしろ、次のようなことだと思うね。すなわち、「モルモット」というのは、家畜の豚の系統なのか？」ということだよ。これをゴードン教授に聞いてみよう。ゴードン教授は、こういうことに関する専門家なんだ。」と、社長は言った。

そういうわけで、社長はゴードン教授に手紙を書いた。あいにく、教授は動物学の標本を集めており、南アメリカにいた。だから、教授の妻が、教授にその手紙を転送することになった。

ゴードン教授は、アンデス山脈の高所にいた。だから、手紙が彼の元に届くまで、何ヶ月もかかった。その間に、社長はモルモットたちのことを忘れてしまった。料金部の部長も、忘れてしまった。モアハウス氏も、忘れてしまった。しかし職員フラナリーだけは、忘れていなかった。その時まで、モルモットは、32匹にまで増えていた。フラナリーは、モルモットについてどうするべきか、料金部の部長に尋ねた。

「モルモット達を売ってはならんぞ。そのモルモットは、君の所有物ではないんだからな。この問題が落ち着くまで、そのモルモット達の面倒を見る。」と職員フラナリーは、部長にそう命じられていた。モルモット達には、もっとスペースが必要だった。フラナリーは広くて、風通しの良い彼らのための場所を、事務所の裏にこしらえた。

数ヶ月後、フラナリーは今や、160匹のモルモットを飼っていることに気がついた。彼は、気が変になりつつあった。

それから程なくして、運送会社の社長はゴードン教授からの返事を受け取った。その手紙は長くて、学問的な手紙だった。手紙の中で、「普通のブタ」は「イノシシ科のイノシシ属」である一方で、「ギニアの豚」は「パンパステンジクネズミ」であることが指摘してあった。

それで、社長は料金部に、「「ギニアの豚」は「豚」ではなく、家庭用ペットとして、25セントだけを請求しなければならない」ということを伝えた。それから料金部は、職員フラナリーに、「160匹のモルモットをモアハウス氏へと引き渡し、1匹につき25セントを取り立てるように」と告げた。

それで職員フラナリーは電報を送り返した。「いや、もう私が飼っているモルモットは、800匹になっているんです。この場合、800匹分取り立てればいいんですか？それともそれは違うんですか？でも、モルモットに与えるキャベツを買うために、私が払った64ドルについてはどうなるんです？」という内容の電報である。

それから、たくさんの手紙がやりとりされた。フラナリーは仕事場の前方、あと数フィートぎりぎりのところにまで、押しやられていた。モルモットたちが、部屋の残りの全部の部分を占めていたのである。手紙がやりとりされ続けるあいだにも、時間はどんどん過ぎていった。

フラナリーは今や、4064匹のモルモットを飼っていた。彼は、我を失い始めていた。その時、彼は会社から電報を受け取った。それによると、「モルモットについての請求書は、間違いだった。**当初の通り、2匹のモルモットについて、50セントだけ集める。**」ということであった。

フラナリーはモアハウス氏の家まではるばる走った。しかし、モアハウス氏は、もう既に引っ越していたのである。フラナリーは街で彼を探したけれども、うまくはいかなかった。彼が事務所に戻ると、彼がモアハウス氏を探しに出かけている間に、206匹のモルモットが事務所から逃げ出し、世間に放たれてしまったことに気がついた。

とうとう、彼は本社から電報をもらった。その電報は、「フランクリンにある本社に、モルモットたちを送れ。」という内容だった。フラナリーは、まさしくその通りにした。するとすぐに、もう1本、電報が入った。それには、「モルモットたちを送るのをもうやめてくれ。倉庫がいっぱいだ。」とあった。しかし、フラナリーは送り続けた。

職員フラナリーは、こうしてやっとのことでモルモットの件から解放され、自由を手に入れた。そして彼は次のように言った。「たしかに、規則は規則なのかもしれない。しかし、このフラナリーがこの運送事務所を運営している限りは、豚もペットだし、牛もペットだし、馬もペットだし、ライオンも、虎も、ロッキー山脈のシロイワヤギだって、ペットだ。そしてそれらのペットに対する料金は25セントにする！」

そして、彼は辺りを見回して陽気に言った。「まあ、ともかく、起こるかもしれなかった最悪の事態ほど悪くはない。あのモルモットたちが、もしもゾウだったら、いったいどうなっていたことか。」

【付録の講師コメント：この逸話を分析すると、どのような教訓が引き出せるのか】

「やはり常識に従っていればよかった」。これがこの話のポイントである。よく考えてみよう。「2匹のモルモットについて、50セントだけ集める」という会社側による最後の判断は、最初の常識的なモアハウス氏の判断と全く同じなのである。ということは、はじめから常識的に考えていれば、「モルモットは豚ではない」、というこの判断が即座になされたはずで、これで本件は終わりであった。この常識の自然さは、最初の時点で、モアハウス氏だけでなく、フラナリー本人や、料金部の部長にさえ、気づかれていたはずである。なぜなら、「料金部の部長は、フラナリーの手紙を読んで、最初は笑った。」という記述があるからである。つまり、「モルモットはさすがに豚ではないよな」と、みんな薄々気付いていたのである。しかしそれでもなお、彼らは非常識な規則に従おうと固執してしまった。だから、**ゴードン教授を呼んでまで為されたこの一連の大騒動の全体を考えると、「鶴の一声」となった教授の学問的見解は、結局、「常識による最初の自然な判断」を迂遠な方法で裏付けていただけであった。ゴードン教授の結論は結局「モルモットは豚ではない」というこのひとことに要約することができ、それはモアハウス氏が簡単な言葉で言っていたことを、難しい言葉で言い直しているに過ぎない。つまり、最初の時点で、自然な常識にすぐに従っていれば、学問的迂回を経る必要さえ、本当はなかったのである。**しかし、フラナリーをはじめ会社の人間たちは、常識による警告を無視してまで非現実的な規則に固執してしまった。すなわち、「モルモットはギニアのブタである」し、「ギニアのブタはブタである」から、「モルモットはブタである」という、純粹に形式的には(つまり言葉の上でのみであれば)成り立つように見えても、我々の生きる現実世界では成りたっていない論理に基づく規則である。それで、このような騒動となった。それゆえ「ある規則が常識的に考えておかしいときには、あくまでもその規則に拘るのではなく、むしろ自然な常識に従って行動することのほうが、結局はメリットが大きくなるのだ」ということが、この逸話の教訓として、引き出せることだろう。

【『多読で親しむ』第6講の和訳 L5共同作成(田中校正済み)】

【(6)：ワシントン・アーヴィング著『悪魔とトム・ウォーカー』】

話を始める前に、今から300年前、1600年代の後半にまでさかのぼろう。当時、世界で最も有名な男のひとりであったのは、キャプテン・ウィリアム・キッドだった。このキャプテン・キッドというのは、海賊であった。キャプテン・キッドは海を航海し、見つけた船はなんでもあれ拿捕した。彼とその部下たちが、これらの船からお金を奪ったのである。キッドは、このお金を、様々な場所に隠した。

キャプテン・キッドは、マサチューセッツ州ボストンでイギリス人に捕らえられ、1701年に処刑された。それ以来、世界中の人々がキャプテン・キッドに盗まれたお金を求めて、多くの場所を探しまわった。1700年代にマサチューセッツに住んでいた人々は、キャプテン・キッドがボストン近辺に宝物の一部を埋めた、と信じていた。そして、ボストンからそう遠くないところに、大西洋に流れ込んでいる小さな川があった。古い話によると、キャプテン・キッドは海からこの川を登った後、大きな木の下に金銀や宝石を埋めたのだという。

そしてその物語によれば、この宝物はキッド船長の良き友だった悪魔自身によって守られていたという。

1727年、トム・ウォーカーという名の男が、この場所の近くに住んでいた。トム・ウォーカーは、感じの良い男ではなかった。トムには、好きなものが一つだけあった。お金である。そして、そのトムよりも下劣な人物が1人だけいた。彼の妻である。トムの妻もまた、お金が大好きだった。夫婦はあまりにお金に対して貪欲であったので、お互いに金品を盗みあいさえた。

ある日、トム・ウォーカーは、暗い森を通過して、家に戻ろうとしていた。彼は泥沼に落ちることのないように、ゆっくりと、注意深く歩いていた。

ついに、彼は乾いた地面の一面に、たどり着いた。トムは倒れた木の上に座った。休んでいるあいだ、彼は棒で地面を掘った。というのも、トムはかつてインディアンらがここで、悪魔に捧げるための生贄として、とらわれた者たちを殺していた、という話を聞いていたのである。しかし、この話によって彼は動揺したりはしなかった。トムが恐れる唯一の悪魔は、彼の妻だけであったから。

トムの棒は、なにやら硬いものに当たった。彼は、それを地面の上に掘り出した。それは、人の頭蓋骨であった。その頭蓋骨の中には、インディアンの斧が入っていた。

突然、トム・ウォーカーには、「その頭蓋骨に触るな！」という怒った声が聞こえてきた。

トムが見上げると、倒木に巨人が座っているのが見えた。トムは今までこのような男を見たことがなかった。その男は、インディアンの服を着ていた。巨人の肌はほとんど黒で、灰に覆われていた。目は大きく、赤かった。巨人の黒髪は逆立っていた。巨人は大きな斧を持っていた。

その巨人は尋ねた。「お前は俺の土地で何をしているんだ？」と。しかし、トム・ウォーカーは怖がることなく、こう答えた。「そりゃ、どういう意味だ？ここはピーボディ氏の土地だぜ。」

見知らぬ巨人は、笑って背の高い木々を指さした。トムは、その木々の1本が斧で切られているのを見た。トムがもっとよくみると、「ピーボディ」という名前がその木に刻まれているのがわかった。ピーボディ氏というのは、インディアンから略奪することでお金持ちになった人であった。

トムは他の木々も見てみた。それぞれの木に、マサチューセッツの有力な金持ちたちの名前が刻まれていた。そしてトムは、自分が座っている木も見てみた。その木にも、「アブサロム・クラウンシールド」という名前が刻まれていた。トムは、「クラウンシールド氏」というのが大金持ちであったことを思い出した。この人物は、キャプテン・キッドがそうであったように、船を略奪することで金持ちになったと言われていた。

突然、その巨人が叫んだ。「クラウンシールドは、そろそろ燃やすころあいだ。この冬、俺はたくさんのお金を燃やすつもりだ！」

トムは巨人に、ピーボディ氏の木を切る権利はあなたにはない、と言った。見知らぬ巨人は嘲笑して次のように語った。「俺にはこれらの木を切るためのあらゆる権利があるのだ。この土地は、マサチューセッツにイギリス人がやってくるよりもずっと前から、私のものだったのだ。その頃、インディアン達がこの地に暮らしていた。そのあと、お前達イギリス人がそのインディアン達を殺した。今や私はイギリスの男たちには、どうやって奴隷を売買するのかを教えてやっている。そしてその妻たちには、どうやって魔女になるのかを教えてやっているのだ」、と。

そこでトム・ウォーカーは、その巨人がまさに悪魔そのひとなのだとわかった。しかし、トム・ウォーカーは、依然として恐れてなどいなかった。

巨人は、キャプテン・キッドが莫大な財宝を木の下に埋めたのだが、自分の許可なしには、誰もその宝物を我がものとするのはできないのだと言った。巨人は、トムがこの宝を所有してもよいと言った。だが、トムは巨人が要求するものを差し出すことに、同意せねばならないのだという。

トム・ウォーカーは自分の命と同じくらい、お金を愛していた。しかし、トムはよく考えるための時間を要求した。

トムは家に帰った。トムは自分の妻に、何が起こったのかを伝えた。妻はキャプテン・キッドの宝を欲しがった。妻はトムに、悪魔が望むものを差し出せと迫った。だが、トムは断った。

最終的に、トムが拒否したことをやると決心したのは、むしろ夫人のほうであった。夫人は、持っていたすべての銀を大きな布きれにくるんで、闇の巨人に会いに行った。それから2日が経った。夫人はとうとう家に帰ってはこなかった。夫人は、それからもう二度と姿を見せることはなかったのである。

人々が後に語ったところによると、トムは巨人に出会った場所にまた行きたらしい。トムは妻の持っていた布が、木の中に引っかかっているのを見つけた。そこでトムは安堵したのである。というのも、トムは妻が持っていた銀を得たからだった。しかし、彼がその布を開いた時、その中に銀はなかった。その中には人間の心臓が入っていたのである。

トムは妻が持っていた銀を失ってしまったことを残念に思ったが、妻を失ったことを残念だとは思わなかった。むしろ彼は、このことについて巨人に感謝さえしたかった。それから、トムは毎日その巨人を探した。トムはとうとう、巨人が望むものを、キャプテン・キッドの宝と引き換えに、巨人に差し出す決心をしたのであった。

ある夜、トム・ウォーカーは巨人と出会い、キャプテン・キッドの財宝と引き換えに、自らの魂を差し出した。しかし、悪魔は、今やそれ以上のものを要求した。悪魔が言うには、トムはキャプテン・キッドの財宝を、悪魔の仕事をするのに使わなければならない。つまり、トムが船を買い、アメリカに奴隷を送る仕事をするのを、悪魔は求めたのである。

前述の通り、トム・ウォーカーは金儲けのことだけをこよなく愛し、金儲けのことしか頭にない男であった。しかし、そんな彼でさえ、人間を奴隷として売買するなどということに同意することは出来なかった。それで、トムはこの要求を断った。

そこで悪魔は、自分の2番目に重要な仕事は金貸しなのだ、と言った。悪魔のためにこの種の仕事をする人々というのは、金を借りた貧しい人々に、彼らが受け取った分よりもずっと多くの金額を強制的に返済させるのである。

トムは、こういう類の仕事ならやりたいと言った。それで悪魔は、トムにキャプテン・キッドの宝を与えた。

数日後、トム・ウォーカーは、ボストンで金貸しをやっていた。助けを必要としている人はたくさんいたのであるが、そういう人はみんな、トムのところに来て来た。トム・ウォーカーは、ボストンで最も裕福な人物になった。人々が返済義務を果たせなかった場合、トムはその人の畑を、馬を、そして家でさえも取り上げた。

年を取り、金持ちになるにつれて、トムは不安になり始めた。自分が死んだら、いったいどうなるのだろうか。トムは悪魔に魂を捧げると約束してしまっていた。もしかしたら、そう、もしかしたら、トムはその誓いを破れるのかもしれない。

それで、トムはとても敬虔になっていった。トムは、毎週教会に行った。トムは、自分がじゅうぶんに祈れば、悪魔から逃れられるのではないか、と思っていたのだ。

ある日、トムは、借りた金を返せなくなったある男の土地を取り上げた。その貧しい男は、どうか返済を待って欲しいと懇願した。「どうか私を破滅させないでください！」とその男は言った。「あなたはすでに、私の全てのお金を取り上げておいでです！」と彼は続けた。

トムは怒り、次のように叫び始めた。「私がお前からどんな金品でも奪っているというのなら、悪魔よ、さあ私を連れ去ってみるがよい！」

それが、トム・ウォーカーの最期だった。というのも、ちょうどその時、彼はある音を聞いたからだ。トムは扉を開けた。するとそこには、漆黒の馬に乗ったあの闇の巨人がいた。巨人は言った。「トムよ、私はお前のためにやって来たぞ。」と。巨人は、トムを持ち上げ、馬に乗せた。そして巨人が馬をたたくと、その馬はトムを乗せて走り去った。

それからというもの、トム・ウォーカーを再び見た者はない。ある農家が、黒い馬が、その上に人を乗せて、狂ったように森の中へと走って行くのを見たという。

トム・ウォーカーが忽然と姿を消した後、当局はトムの財産を接収することに決めた。しかし、取り上げられるものはなにもなかったのである。トムが土地や馬を所有していたことを示す記録が、全て焼け、灰と化していたのだ。金銀が入っていたはずのトムの箱も、中身は木々の小さな欠片だけになっていた。その木々はといえば、最近切り出されたものであった。トムの馬たちも死にたえ、彼の家も突然焼け、灰になってしまった。

【『多読で親しむ』第7講の和訳 L5共同作成(田中校正済み)】

【(7)：ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)著『日本海に沿うて』】

もう何年も前のことであるが、鳥取のごく小さな宿屋が、最初の客として、ある行商人を泊めた。主人はその宿屋が評判になることを望んでいたもので、その行商人は格別にもてなされた。宿は新しかったのだが、なにぶん主が貧しかったので、「道具」、つまり備え付けられた家具や器具のほとんどは、「古手屋(ふるてや)」から購入されていた。しかしそれでもなお、すべてのものが小綺麗で、心地よくて、感じがよかった。行商人はもりもりと食べ、温まった良い酒をたっぷり飲んだ。そしてその後で、彼の寝床が柔らかい床の上に準備され、そして彼は横になって、眠りについた。

[ところで、ここで日本式の寝床について、ひとこと申し上げるために、少しのあいだこのお話を中断しなければならない。どんな日本家屋であれ、誰か同居人が偶然病気でふせっているのでもない限り、あなたが全ての部屋を訪ねて、その隅々まで覗いたとしても、日中に寝床を見かけるといことはまずありえない。実際、西洋的な意味でのいわゆる「ベッド」が日本には存在しないのである。日本でそれに相当するものには、骨組みもなければ、バネもついていないし、マットレスも、シーツも、毛布もついていないのである。それは、綿が押し込められたというか、詰められているような、厚いキルトだけで構成されており、そしてそれが「布団」と呼ばれているのである。ある数の「布団」が「畳(床の敷物)」の上に敷かれ、そしてある数の別の「布団」が、その上からかけられるために使われる。富者は、5枚や6枚のキルトの上に寝て、好きなだけその上からかけることができるのだが、それに対して貧者は、2枚か3枚で満足しなければならない。そしてもちろん、「布団」には多くの種類がある。それこそ、西洋では暖炉のそばに敷いているような敷物程度の大きさしかなく、しかもそれよりさほど分厚いわけでもない、使用人たちが使う木綿の布団から、長さ8尺で幅7尺の、裕福な金持ちだけが買える、厚くふっくらして極上の絹布団まで、さまざまである。更に、「夜着(よぎ)」というのもあって、これは「着物」のように大きな袖がついた大きなキルトであり、極端に寒い時には、これを着るとかなり快適だろう。これらのもの全ては、きちんと折り畳まれ、壁の中に設計され、「襖(多くの場合、繊細で上品な意匠が凝らされた不透明な紙で覆われている、魅力的な横開きの仕切り戸)」で閉じられた空間の中に、日中はしまい込まれてしまうのだ。また、そこには例の妙な木製の枕もしまわれる。この枕というのは、日本式の髪が眠っている間に乱れたりしないように作られたものである。

この枕には、ある種の神聖さが宿るのだが、しかしこの枕に関する信仰の起源と、それから正確にはその信仰がどのようなものであるのかについて、私はこれまでに学ぶことができていない。ただし、以下のことだけは知っている。すなわち、その枕に足で触れることが、甚だ悪いことだとされているということ、それから、たとえそれが不慮の事故であっても、もしその枕が蹴られるとか、あるいはそのように動かされるといったことがあれば、そのような不注意を償うために、人は枕を両手で額まで持ち上げ、「私が許されるように祈ります」という意味の「ごめん」という言葉を言いながら、元の位置へと、うやうやしく置き直さねばならないということ、である。]

さて、人の世の常として、夜が涼しくて寝床が心地の良いものであればなおさらのことであるが、たっぷりの温かい酒を飲んだ者は、その後でぐっすり眠るものである。しかし、その行商人は、ほんの少しの間しか眠らぬうちに、彼の部屋の中の声によって、いつも同じ問いをお互いに投げかけている子供の声によって、目を覚ました。その声は、「あにさん、寒かろう?」「お前、寒かろう?」と話していた。彼の部屋に子供がいたとしたら、彼はむっとするかもしれないが、しかし、驚くことはない。というのも、このような日本の宿には、部屋と部屋との間に「襖(ふすま)」が用意されているだけで、扉はなかったからである。そのため彼にとって、このことは、どこかの子どもが、暗闇の中で彼の部屋にまちがって迷い込

んでしまったに違いないと思われた。それでその行商人は、なにか穏やかな小言を発した。ほんの一瞬だけ沈黙が訪れた。その後、可愛らしく、かぼそく、悲しげな声が、彼の耳元で「あにさん、寒かろう？(お兄さん、もしや寒いではありませんか?)」と尋ね、そしてもうひとつの可愛らしい声がいたわるように「お前、寒かろう？(いやむしろ、汝こそ寒いのでしょうか?)」と答えた。

彼は起き上がって、「行灯(あんどん)」の中の蠟燭にふたたび火をつけ、部屋を見回した。誰もいなかった。「障子」は全て閉まっていた。彼は押入れの中も調べたが、空っぽだった。彼はいぶかりながらも、行灯の火を灯したままで、再び横になった。するとすぐさま、声はまた、ぶつぶつと枕元で話した。

「あにさん、寒かろう？」

「お前、寒かろう？」

そのとき、初めて、彼は冷気が這い上がって来るのを感じてぞっとした。そしてその冷気というのは、夜の冷気ではなかった。彼は、何度も何度もその声を耳にし、その度にますます恐ろしくなっていた。というのも、彼はその声が布団の中にいると気づいたからである。このように声を上げていたのは、掛け布団だったのだ。

彼は大急ぎでわずかな荷物をひとまとめにして、そして、階段を駆け下り、宿の主人を起こして何が起こったのかを語った。すると主人は、ひどく憤慨して、「はっきり申し上げますが、お客様を喜ばせるためにこそ、万事がなされたのです。しかし、お客様が高級なお酒をあまりに飲んでしまわれたので、お客様は悪い夢でもご覧になったのでしょうか。」と答えた。それでもなお、行商人は、ただちに彼の部屋の支払いを済ませ、そしてどこか他で泊まる場所を探すと張り張った。

次の夜、その宿にはまた別の客がやって来て、その晩を過ごすための部屋を求めた。そしてその夜更けに、主人はその客にまた同じ話を聞かされて起こされた。そしてこの客は、奇妙なことに、酒を一滴も飲んでなどいなかった。それで主人は、この宿屋の商売を台無しにしようとしている、嫉妬深いたくらみでもあるのではないかと思ったので、感情をむき出しにして、次のように答えた。「まさにあなた様のお気に召すようにと、万事がきちんとなされたのです。それなのに、あなたは縁起の悪い、人を困らせるような言葉を口にされます。そして、私の宿屋は私の生活手段なのだということ、これもあなたにご存知でしょう。いったい何のために¹そんなことをおっしゃるんですか。なんの道理もありはしません²！」と。するとその客は、感情的になって、はるかに酷いことを大声で言い返した。こうして両者はひどい喧嘩別れとなった。

しかし、客が帰ったあとで、この宿屋の主人は、これまでのことがどうにもおかしいと思ったので、布団をよく調べてみるために例の空き部屋へと上がっていった。そして彼がそこにいる間に、彼は例の声を聞いた。主人は、客達が本当のことしか述べていなかったのだと気がついた。声を上げている布団は、1枚、たった1枚だけだった。残りの布団は黙っていた。主人は、その布団を彼の部屋へと持って行って、夜の残りの時間は、その布団の下で横になった。そして、例の声は夜明けごろまでずっと続いた。「あにさん、寒かろう？」「お前、寒かろう？」と。それで、主人は眠ることができなかった。

しかし、夜明けに主人は起き上がり、この布団を購入した「古手屋」の店主を探しに、外へ出た。その古手屋は何も知らなかった。その店主は、この布団をもっと小さな店から買って、そしてその小さな店の店主もこの布団をさらに貧しい、この街の最も辺鄙な郊外に住んでいる業者から購入していたのだ。それで、宿家の主人はこれらの店々をひとつずつ訪れ、事情を尋ねてまわった。

こうしてついに、その布団はもともと、ある貧しい家族のものであったということ、そして、この布団は、その家族がかつて住んでいた郊外の小さな家の家主から、購入されたものであるということが分かった。さて、この布団に関する話は以下の通りだ。

¹ ここに出現する「Wherefore that」を、我々はいわゆる「余剰のザット(pleonastic that)」と解釈した。

² ここに出現する「right-there-is-none!」について、我々は「right」は不可算名詞で取り、「none」は以下の文例のように単独で用いる副詞の用法であると解釈した。

They have changed none in all that time. それだけ年月がたっても少しも変わっていない

その小さな家の家賃はひと月たった「60銭」であった。しかしこの額ですら、貧しい人々が工面するとなると、大金であった。父親は月にたった2円か3円かしか稼げず、また母親は、病弱で働くことが出来なかった。しかも、この家族には子どもがふたりいた。6歳の男の子と、8歳の男の子である。そしてこの家族は、鳥取に外から移り住んできた者たちであった。

ある冬の日、その家の父親が病気になった。そして1週間病んだのちに、亡くなり、そして埋葬された。それから、長いこと病を患っていた母親も、夫の後を追うように亡くなった。そして、子供たちだけが残された。子供たちは、助けを求めることが出来るような人を、誰も知らなかった。だから、生きるために、売れるものはなんでも売り始めた。

売れるものが多くあるわけではなかった。死んだ両親の衣類、子供たち自身の衣服の大部分、幾らかの木綿のキルト、そして火鉢、お椀、湯呑み、その他つまらぬものといった、粗末な家財道具がわずかにあるばかりである。毎日、彼らは何かを売っていき、そしてとうとう一枚の布団だけが残った。ある日、ついに食べ物も底を尽きた。そして家賃は、払われていなかった。

「大寒(だいかん)」と呼ばれる、最も酷寒となる時季がやってきた。そしてその日、あまりに雪が深く積もっていたので、兄弟はその小さい家から遠くへ離れ出ていくこともできなかった。だから、彼らは一枚の布団の下におり、一緒に震えて、子供らしく、「あにさん、寒かろう?」「お前、寒かろう?」と、お互いになぐさめあうことしかできなかったのである。

彼らには火もなかったし、何か火を起こせるようなものもなかった。闇が訪れて、氷のように冷たい風が、その小さな家の中に音を立てて吹き込んでいた。

彼らはその風が恐かったが、大家の方がもっと怖かった。その大家は、子どもらを叩き起こして、家賃を要求するのである。この大家は、人相も悪く、無情な男だった。大家は、自分に支払えるようなものを何ひとつ子どもらが持っていないのだと分かると、この兄弟を雪の中へと追いやり、そして兄弟からたった一枚の布団までもも取り上げ、家から閉め出したのである。

他の服はすべて、食べ物を買うために売ってしまっていたので、この兄弟は、薄く青い着物をめいめいにただ一枚だけ着ているのみとなった。そして兄弟には、行くあてもなかった。そう遠くないところに観音堂があったが、あまりに雪が高かったので、彼らがそこにたどり着くことは出来なかった。だから、例の大家が立ち去ったあとで、兄弟は家の裏にまた這い戻ったのである。そしてそこで、寒さからくる眠気が彼らを襲った。お互いをあたためようと抱きあいながら、彼らは眠った。兄弟が眠っている間、神々は彼らに、霊的なほど白く美しい、新しい布団をかけてやった。だから彼らはもうこれ以上、寒さを感じることはなかった。それから何日も、彼らはそこで眠った。その後、誰かが彼らを見つけ、千手観音堂の「墓場」に彼らのための寝床が設けられた。以上の次第を聞いて、宿屋の主人は、その布団を寺の僧侶らに渡し、この小さな魂たちのために読経をしてもらった。それ以降、この布団は話さなくなった。

【『多読で親しむ』第8講の和訳 L5共同作成(田中校正済み)】

【(8)：ジャック・ロンドンの『キーシュ』】

キーシュは、極地の海のはずれに住んでいた。キーシュは、エスキモー式の時間の数え方で言うと、13個の太陽を見たことがあった。エスキモーのあいだでは、毎冬の太陽は去っていき、地を暗闇にかえてしまうことになっている。そして翌年、再び暖かくなるように、新しい太陽が戻ってくるのだ。

キーシュの父親は、勇敢な男だった。しかし彼は、食料のための狩りの最中に亡くなった。キーシュは、彼の一人息子だった。キーシュは、イキーガという名の母親とともに暮らしていた。

ある夜、首長クロシュ・クワンの大きなイグルーで、村の会議が開かれた。キーシュは他の人たちと一緒にそこにいた。キーシュは耳を傾け、そして沈黙が訪れるのを待っていた。

そこでキーシュは次のように言った。「あなた方はたしかに、いくらかの肉を僕らの家族に分けて下さっているけれども、その肉はたいてい古くて固くて、骨ばかりです。」

狩人達はそれを聞いて驚いた。子供が狩人達に生意気な口をきいたからである。子供が一人前の大人のように発言するなんて！

「僕の父ボークは、偉大な狩人でした。ボークは、いちばん腕のいいふたりのハンターのどちらよりも、多くの肉を家に持って返ってきていて、しかもボークは、全ての人が平等な分け前を受け取れるように肉を分けたと言います。」と、キーシュは言った。

「おい！何を言うか！」と狩人らは叫び、「その子供をつまみ出せ！寝かしつける。子供が老人に向かってこんなふう文句を言うとはけしからん！」と続けた。

キーシュは、騒ぎが止むまで待ってから、次のように言った。「アー・グルック、あなたには妻がいますね。だから、あなたは妻のために話していらっしゃる。でも、僕の母には僕しかいないんです。だから、僕が僕の母のために話しているんです。僕が言ったとおり、ボークは優れた狩人でした。しかし、そのボークももういない。この場合、部族が肉を得た時には、ボークの妻である母イキーガと、ボークの息子である僕が、肉の分け前を受け取るというのが、公平というものです。ボークの息子キーシュが、こう意見を述べたのです。」

ふたたび、首長のイグルーの中で、大きな騒ぎが起こった。会議は、キーシュにもう眠るようにと命じた。キーシュにはもう食料をいっさい与えないということについてさえ、会議の議題は及んだ。

キーシュは跳ぶように立ち上がった。「聞いてください！僕はもう二度とイグルーの会議で発言するつもりはありません。父、ボークのように肉を取るために、僕は狩りに出かけます」と、キーシュは叫んだ。

キーシュが狩りについて発言すると、盛大な笑いが起こった。キーシュが会議から退出する間も、その笑い声が止むことはなかった。

翌日、キーシュは大地と氷が接する海岸に向け、出発した。キーシュが出かけるのを見届けた人達は、キーシュが自分の弓と沢山の矢を携えているのを見た。キーシュの肩には、父親の大きな狩猟用の槍がかつがれていた。この姿を見て、またも、笑いが起こった。

1日が過ぎて、そして次の日も過ぎた。3日目はひどい強風であった。キーシュの消息はなかった。キーシュの母イキーガは、彼女の悲しみを表すために、アザラシの油を焼いたものを自分の顔に塗った。村の女たちは、小さな男の子が狩りに行くのを許したことについて、夫らをなじった。男たちは何も答えなかったが、キーシュの遺体を探すための準備をしていた。

次の日の明け方のことであった。キーシュは村の中に歩いて入ってきた。彼の肩には、新鮮な肉が担がれていた。「犬を連れ、そりでゆきなさい、男らよ。僕の足跡を辿り、1日進むのです。」とキーシュは言った。「これよりもさらにたくさんの肉が氷の上にあるんです。雌グマと、それからその2匹の子グマの肉ですよ。」

キーシュの母は、とても喜んだ。キーシュは、一人前の男のような顔をして、「こちらにいらしてください、イキーガ。さあ食べましょう。そしてその後、僕は眠ります。僕は疲れていますから。」と母に言った。

キーシュが彼のイグルーに帰ったあと、たくさんの議論がなされた。クマを殺すというのは、そもそも危険なことであった。しかし、子グマを連れた母グマを殺すというのは、さらにその3倍も危険なことだった。男たちは、キーシュがそのようなことを成し遂げたとは、信じなかった。しかし、女たちが例の新鮮な肉を指さした。最終的に、男たちは残された肉を取りに行くことに合意した。でも、それは彼らにとってあまり愉快的ことではなかった。

ある男が、もし仮にキーシュがクマを殺したのだとしても、恐らくキーシュは肉を細かく切り分けるところまではしなかつたろうと言った。ところが、男らが狩場に到着した時、男達はキーシュが、クマを単に殺したというだけでなく、まさしく一人前の狩人のように、細かく切り分けることさえやっていたのだと分かった。

こうして、キーシュについての謎が産まれた。

キーシュは次の旅で、若いクマを殺した。そしてさらにその次の旅では、大きな雄グマと、その連れあいのクマを殺したのである。

すると村には、魔法と魔術の噂が流れた。ある人は「キーシュは悪霊と一緒に狩りをしている。」と言った。そしてまた別の人は「恐らく彼の父親の霊がキーシュと一緒に狩りをしているんだ。」と言った。

キーシュは相変わらず、村に肉を運んで来た。キーシュを偉大な狩人なのだと考える人達もいた。老いた首長クロシュ・クワンの後継には、キーシュを据えるという話もあった。彼らは、キーシュが会議にやってくることを願って、待っていた。しかし、キーシュは会議には決して現れなかった。

ある日、キーシュは次のように言った。「僕はイグルーを建てたいのです。でも、その時間がない。僕の仕事は狩りをすることだからです。だから、もし僕の肉を食べている村の皆さんが、僕のイグルーを建ててくれるなら、公平になるのですが。」とキーシュは言った。それでキーシュのイグルーが建てられた。このイグルーは、首長であるクロシュ・クワンのそれよりもさらに大きいものであった。

ある日、アー・グルックはキーシュに「お前さんが悪霊と一緒に狩りをしていて、そしてその悪霊が、お前さんがクマを殺すのを手伝っているなどと言われておるぞ。」と話した。

「それでその肉は美味しくないんですか？」と、キーシュは答えた。「これまで村の誰かがその肉を食べた後に病気にでもなりましたか？いったい何を根拠に悪霊が僕と一緒にだなどと言っているんです？それとも、そんなことを言うのは、単に僕が良き狩人だからですか？」

アー・グルックは何も答えなかった。

会議はキーシュとその肉の件について、夜がふけるまで議論した。それで会議は、キーシュをこっそりと見張ることに決めた。

キーシュが次の狩りに出かける時、ふたりの若い狩人、ビムとバウンが、キーシュのあとをつけた。5日後、彼らは帰ってきた。そのふたりの話を聞くために会議がまた開かれた。

ビムは次のように語った。「兄弟たちよ、俺たちはキーシュの後をつけた。そしてキーシュは俺たちに気づかなかつた。1日目、キーシュは大きなクマに出くわした。キーシュはそのクマに大声で呼びかけた。クマはキーシュを見て、怒り出した。クマは足で高く立ち上がって、唸った。ところがキーシュは、そいつに近寄って行ったんだ。」

そこでもうひとりの狩人、バウンが言った。「そう、俺たちは見たんだ。その熊はキーシュめがけて走り出した。それでキーシュは逃げた。でもキーシュは、逃げながら、ちいさく丸い球を氷の上に落としていったんだ。すると熊は立ち止まって、その球の匂いを嗅いで、それを喰ったんだ。キーシュは逃げ続けて、氷の上にどんどんその球を落として行った。そして熊は、キーシュを追いかけ、その球を食べていった。」

会議の参加者たちは、すべての言葉を聞き漏らすまいと、耳を傾けた。ビムが話を続けた。「するとその熊は、急にまっすぐに立ち上がって、苦痛で叫び声をあげ出したんだ。」

「悪霊だ」と、アー・グルックが言った。

「それについては分からない」、とバウンは言った。「俺にわかるのは、この両目に映ったものだけだ。やがて熊は弱って行き、それでその熊は座り込んでしまって、鋭い爪で自分の毛を掻き毟ったんだ。その日は1日中、キーシュはその熊のことを見張っていた。」

「そこから3日間、キーシュは、その熊をのを見張りを続けた。熊はどんどん弱っていった。キーシュは用心深く熊のところに近づいて、そしてそいつに父親譲りの槍をぶっ刺したのさ。」

「それから？」と、クロシュ・クワンが尋ねた。

「それから、俺らはそこを離れたのさ。」

その午後、会議では話し合いが重ねられた。キーシュが村に着いたので、会議は使者をキーシュのもとに送り、会議に来るようにと頼んだ。しかしキーシュは、疲れているし、お腹も空いているのだと言った。キーシュは、もし会議を開くために話し合いの場が入用だというのなら、キーシュのイグルーは大きくて、大勢の人が中に入れるだろうと言った。

クロシュ・クワンは、会議の人々をキーシュのイグルーに連れてきた。キーシュは食事中だったが、彼らを歓迎した。クロシュ・クワンは、ふたりの狩人がキーシュがクマを殺すところを見たと言った。それから、真剣な声で「我らは君がどうやってそのクマを殺したのかが知りたいのだ。魔法や魔術を使ったのかね。」とキーシュに尋ねた。

キーシュは上を向いて、微笑んだ。「違います、クロシュ・クワン。僕はただの男の子ですよ。魔法や魔術なんか全く分からない。でも僕は、クマを殺す簡単なやり方を見つけたんです。これは魔術じゃなくて、知恵なんです。」

「ああ、キーシュよ。我らにそれを教えてくれるかい。」とクロシュ・クワンは震える声で尋ねた。

「教えますとも。とても単純なんです。見てください。」

キーシュは、細いクジラのヒゲ³を1本、拾い上げた。その先端は、ナイフのように鋭くて、尖らせてあった。キーシュは、ヒゲを輪の形になるように曲げた。突然、キーシュは手を離れた。すると、ヒゲは鋭いパチンという音を立てて真っ直ぐになった。そして彼は、アザラシの肉の塊を手にとった。

キーシュは次のように説明した。「さて、まずは鋭くて細いくじらのヒゲの欠片で、輪っかを作ってください。それで、この骨の輪を、アザラシの肉の塊の中に入れるんです。そしてそれを凍らせるために、雪の中に入れてください。それで、内部に輪が入っているこの肉の球を、クマが食べます。この肉がクマの体内に入ると、肉が温まります。すると骨は、パチンと真っ直ぐになるというわけです！鋭い先端部のせいで、クマは具合が悪くなる。そうなれば、そのクマを殺すのは容易いことです。ほら、単純でしょう。」

アー・グルックは「おお！」と言った。クロシュ・クワンは「ああ！」と言った。その場にいた各々が自分なりの仕方で唸り声をあげ、そしてみな、納得したのであった。

これが、ずっと昔に北極海のはずれに住んでいた男、キーシュの物語である。彼は魔術ではなくて、むしろ知恵を使ったことによって、最も貧しいイグルーから身を立て、その村の首長にまでなったのであった。そしてその後何年もの間ずっと、キーシュの村の者達は幸せだった。ひもじさゆえに夜ごと泣く者は、ひとりとしてなかった。

³ ヒゲクジラのひげは、歯の退化したもので、芯やコルセットなどにして使われる。